

和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

2022
10.1

44号

巻頭言……………1 / 総会・記念講演会……………2-6 / 会員だより……………7・8

福島県田村市の森……………9 / 長瀬町宝登山下刈り活動報告……………11

令和4年度 第15回通常総会開催……………11

NHKスペシャル「明治神宮 不思議の森」の放送

理事長 小林 公彦

今年の第15回総会記念講演会では「本多静六と渋沢栄一」の関わりについて久喜市郷土資料館の星野諒氏にご講演をいただきました。講演の中で本多静六博士の偉大な功績の一つとして、明治神宮の森づくりについてお話されました。

講演を聞いて間もなく、7月にNHKスペシャル「明治神宮 不思議の森」が放送され、改めて明治神宮の森づくりの壮大な計画を思い知らされました。

明治天皇が明治45年崩御され、御陵は京都に置かれました。東京にも御陵に代わるものとして明治神宮と共に鎮守の杜の造営が決定されました。100年前の天才たちが当時荒地だった場所に「太古の森」を作ろうと壮大な実験を仕掛けたのです。その中心となったのが本多静六博士です。

本多静六博士は、本郷高德と上原敬二と共に、林苑計画書に基づき、「永久に荘厳神聖なる林相」を考えました。樹木の天然更新により、様々な樹種の木を植え、森を構成する主木を交代させ、最終的には広葉樹林の森を作り、人の手を加

えず永遠に続く森、それははるか昔の地に広がっていたような広葉樹の原生林にする計画です。

この番組は1915年森づくり計画がスタートしてから100年経過し、創建以来初めて行なわれた生物総合調査に独占密着し、オオタカを頂点とした3000種もの多様な動植物が発見された森の全貌を丁寧に観察し記録に残しています。そうした過去100年の貴重な映像と共に、関

東大震災、戦争、東京オリンピックなどの東京の激動の歴史を乗り越え、それぞれの時代と深く結びついた森の驚きのドラマを描いています。また、先人たちが工夫して植栽した大切な森を、100年の間、守ろうとする人々をも映像化したものです。

「明治神宮 不思議の森」は2016年1月に初めて放送され、その後6回再放送されているそうです。いかに視聴者からリクエストが多かったことが分かります。

最近、明治神宮外苑地区を再開発するために、東京都は樹齢100年級の巨木を約

900本伐採し、代わりに若木1000本を植える計画があるようです。伐採されるのはまさに100年前に植えられた木です。

ある学者は、樹木の冷却効果に着目し、「100年の大木と新たに植える若木ではレベルが違う。緑の持つ効果は増えるどころか、確実に損なわれる」と述べています。

また、ある学者は「新しく植えた木が、今の木と同じ冷却効果を発揮するのは100年後、再開発で建てた高層ビルのコンクリートは熱を貯めこみ、ビルの空調設備の排熱は都市を温めヒートアイランドの一因になる。天然のクーラーを減らして、ストーブを作るようなもの」と再開発を危惧しています。

先人が先を見据えて残してくれたかけがえのない財産を次世代に継承していくことこそが大切なような気がいたします。

百年の森づくりの会も20年前から水を育む森づくりをしています。天然のクーラーとなるような森の財産を是非後世へ継承していきたいと思っています。

総会・記念講演会（令和四年六月五日）

本多静六と渋沢栄一



講師 久喜市立郷土資料館 主事兼学芸員 星野 諒

皆さんこんにちは。本日は埼玉県
の偉人本多静六博士と渋沢栄一翁に
ついてお話しします。二人は幕末から
明治、大正と時代の転換期を生きた
偉人であり、近代日本の礎を築いた
といっても過言ではありません。今
日の講座では、本多博士の生い立ち
と功績、また昨年話題になった渋沢
栄一についてご紹介して、その後二
人の関係した事業や共通点などをお
話していきます。

【本多静六の生い立ち】

本多静六は日本で最初の林学博士
として、明治から昭和にかけて東京
の日比谷公園をはじめ、水戸の偕楽
園やさいたま市の大宮公園など国内
数百か所の公園の設計や改良に携わ
り、また、森づくりにも尽力されま
した。学問・実業活動のほか、著作
活動も旺盛で、一般には「処世の達
人」「資産家・蓄財家」としても知
られています。

静六の生家は武蔵国埼玉郡河原井
村、現在の久喜市菖蒲町河原井にあ
りますが、慶応2年折原家の六男と
して生まれました。折原家は代々村

の役人を務める富農でしたが、折原
静六は少年時代、人一倍負けず嫌
いで体が丈夫だったようで、親の威光
も手伝い、ガキ大将として活発な幼
少期を送っていたようです。しかし
9歳の時に父が急逝したため、当時
多額の借金もあったことから家業を
助けながら学校に通うようになりま
す。

静六は地元の幸福寺を学舎とした
河原井学校で勉強に励んでいました
が、次第に東京で勉強をしたいと思
い始めます。しかし、家計が苦しか
ったため、「百姓が学問をするとも
のぐさになる」と言って反対する祖
父や母を説得する日々が続いたよう
です。15歳になって、兄の金吾の協
力もあり、ようやく上京が許されま
す。上京先は当時岩槻藩塾講師から
大蔵省の役人に転じた島村泰先生の
屋敷で、住み込みとして働きながら
学問に励んでいました。東京の学問
は農閑期だけで、5月から秋の麦ま
きまでは家業を手伝うことが条件
で、静六はわずかな時間を見つけて
は勉強に励む暮らしを続けていまし
た。例えば、家業を手伝いながら勉

強する方法として、「米搗き学問」
を編みだし、足で杵を押し上げる作
業をしながら、リズムをとって本を
暗記する勉強法を編み出しました。

実は、この頃静六は東京深川の渋
沢栄一邸を訪ねています。義理の兄
が門番をしていたそうで、学問の教
えを請おうとしましたが、門前払い
に会ったといいます。その時の憤慨
は甚だしく、後に静六は「二度と渋
沢邸の門など、くぐるものかと決心
して以来東京で駒場の学校を卒業す
るまで一度も渋沢さんの厄介にはな
らなかつた」と回想しています。

明治17年、18歳の時、島村先生の
勧めにより、東京山林学校（後の東
京帝国大学農科大学、東京大学農学
部）に入学しました。これが林学を
目指すきっかけとなったわけです。
家族にも努力が認められ、祖父から
も激励され、家族の養蚕収入により
資金援助も受けられるようになりま
した。入学した当初、静六の成績は
50人中50番目で、周りは中学・師範
学校を卒業した学生ばかりで後れを
とっていました。猛勉強の末、農
科大学を首席で卒業します。そして

農科大学在学中に縁談が持ち込ま
れ、静六は旧幕臣の本多家の婿養子
となり、「本多」姓となります。

婿養子となった静六は本多家の資
金援助により当時先進国であったド
イツへ留学を果たします。横浜港を
出航し、船で1ヶ月かけて、ドイツ
のターラントへ向かいました。静六
は当時の記録を『洋行日誌』という
日記に残しており、日本でお茶を飲
むように、習慣的にビールを飲むド
イツの文化について記しています。
それによると当時、ドイツのビール
はお茶よりも安く、人々は朝250ml、
昼500ml、夜1.5ℓ飲んだそうです。

ドイツに着いて1年経過したこ
ろ、資金援助を受けていた本多家の
銀行破産により本国からの送金が途
絶えてしまいます。そのためドイツ
の滞在費が2年しか残らなくなり、
静六は生活を切り詰め、ドイツの4
年の修了過程を2年で修了すること
を決意しました。その努力の結果、
静六は経済学の「ドクトル」の学位
を取得しました。なぜ林学でなく経
済学の学位だったのか、というと、
ドイツでは国有林経営を担当する技

術者養成を主目的として林学を学ばせていたという背景があります。植林や造林という専門家であつても、経済的にどのように活用するのか、資金的運用をどうしていくのか学ぶことの大切さを学ぶ学問であつたようです。

明治25年、欧米を視察した後帰国し、同年東京帝国大学助教授に就任しました。そして、その7年後の明治32年には、長年書き留めていた熱帯、温帯などの林の分布変化についての論文「森林植物帯論」が評価され、日本初の林学博士学位を取得しました。

ここで本多静六の家族について少し触れてみます。静六の妻は銚子と言いますが、本多銚子は、実は日本4番目の女医です。日本初の女医は荻野吟子ということで皆さんも良くご存じでしょうが、本多銚子のことあまり知られていません。医者として開業するほどの実力のあつた方で、後に静六の論文の翻訳の手助けをするなど、静六を支えることになっています。

もう一人、静六の養父、本多晋ですが、この方は徳川慶喜に仕えた幕臣で彰義隊の幹部でした。彰義隊は新政府軍と戦争になるわけですが、本多晋は辛くも生き残り、明治維新後は民部省や大蔵省に出仕しました。ちなみに、本多晋が省庁入りし

た背景には渋沢栄一が推薦したという話も残っています。

【本多静六の功績】

本多博士は様々な功績を残していますが、まず一つ目が鉄道防雪林の設置です。明治24年に東北本線が開通しましたが、当時、東北では雪崩や吹雪などの雪害に悩まされていました。そのような中、日本鉄道会社理事であつた渋沢栄一は、本多博士から防雪林の話聞いて導入することになります。雪崩や吹雪を緩和するために山林を活用するという画期的な方法です。防雪林にはスギを多く植林し、適していないところにはヒノキを植えました。林間は60間（約110m）、防雪林の間伐や更新材などで得られた木材は駅舎や枕木に用いたり、売却するなどして、鉄道林の維持管理費を自ら賄えるように工夫しました。ここにはドイツの海外留学で学んだ経済学の知識が活かされており、「自立した経済」によって鉄道の経済的基盤を支えました。

ら、最後に入る棺桶まで、木の世話になるものである」と説き、山林の効用を強く訴えていました。

また、本多博士は学生が林学を学ぶ場所として、演習林の創設が必要であると考え、明治27年、千葉の清澄（現在の鴨川市）にあつた国有林を使って、日本で初めての演習林を創設しました。専門家のいなかった当時、演習林の創設と管理に苦労は絶えなかつたようです。ちなみに本多博士は演習林も、防雪林の時と同じように、木材を財源として捉えており、いつでも資産として運用できるように準備していました。その木材は後に売却され、東京帝国大学の財政難を救うことにもなります。

三つ目は明治神宮内苑の森づくりです。明治天皇が明治45年に崩御され、ご陵墓は京都伏見桃山に内定していましたが、当時東京にもお墓に代わるものを、という市民の声から明治神宮の創設が決定されました。明治神宮の内苑は仁徳天皇陵をモチーフとして、シイ、カシ、クスノキなどの常緑広葉樹で構成することが決まり、本多博士は「天然更新」の考えを導入しました。

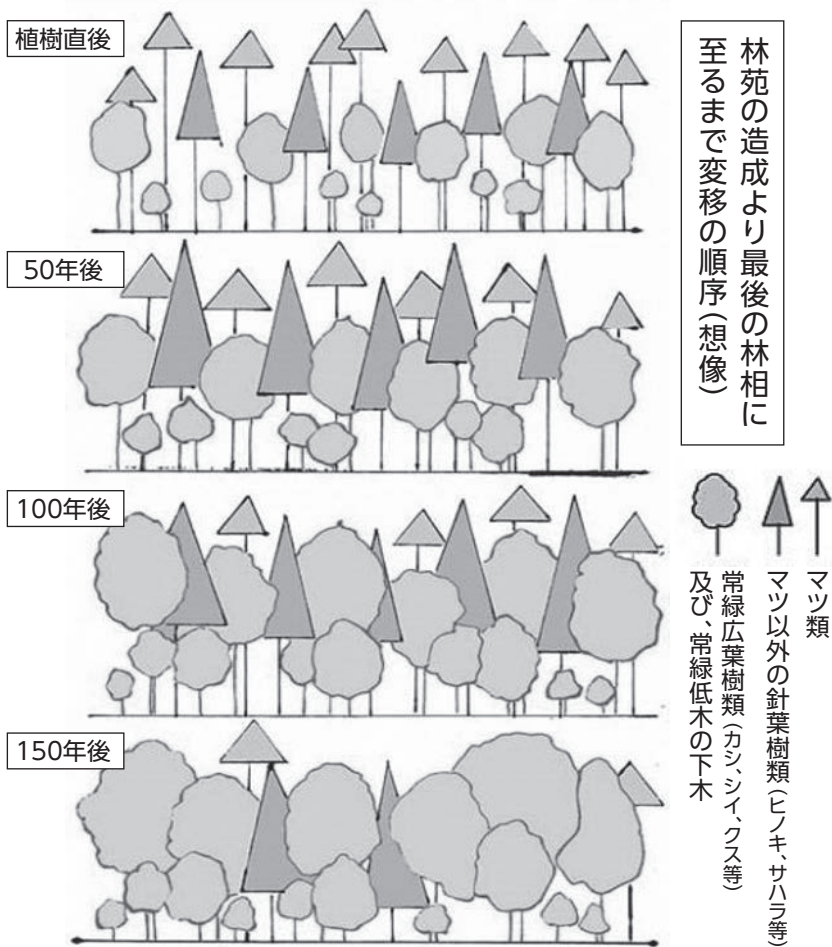
「天然更新」とは、様々な種類の木を植え、木の成長・枯死によって土壌を育て、森を構成する主木を交代させていく方法で、最終的にはカシ・クスノキなどの常緑広葉樹、大

樹で森が作られ、人の手を加えず森が永続していくという考え方です。

当時、神宮の予定地代々木はマツが点在する痩せた土地でした。そのため、第一段階ではマツ類を中心とした痩せた土地でも根付く樹木を利用し、その間にヒノキ・サワラなどの針葉樹、さらに最終的に主木になるカシ・クスノキなどの苗木を植えました。第二段階では、マツ類が数十年のちに、ヒノキなどに負けて枯れ、主木が交代し、第三段階で、カシ・クスノキがヒノキを圧倒し、最終的な段階でカシ・クスノキが天然の森として、密林のような永遠に続く森に移行します。明治神宮の造営時には全国から9万5千本の木が集められました。その中には本多博士の生まれ故郷である菖蒲町河原井から選ばれたクスノキもあります。このクスノキは南参道一の鳥居のすぐ右側に植えられ、今でも健在です。

また、造営時から、神宮苑内の落ち葉は、参道に落ちたものも含め、すべて捨てられることなく森に戻されています。この「天然更新」の考え方は現代でも引き継がれています。100年経って、本多博士の計画通り、今は霊験あらたかな森になっているということです。ちなみに明治神宮創設にあたって、渋沢栄一は神宮奉賛会設立準備委員長となり、財界人による献費集めに貢献しています。

林苑の造成より最後の林相に至るまで変移の順序(想像)



明治神宮の森造成に先立ち、本多静六らが想定した森の未来予想図
(明治神宮御境内林苑計画「明治神宮造営局技師本郷高德著に着色」)

四つ目は公園の設計・改良です。本多博士は日本国内の公園数百カ所の設計・改良に携わりましたが、日本で始めて手掛けた公園は、明治36年に開園した日比谷公園です。日比谷公園を手掛けたきっかけは、近代建築の権威である辰野金吾博士から話を持ちかけられたことです。辰野博士は東京市から西洋風な公園の設計を依頼されましたが、西

洋公園の知識の無かった辰野博士は、ドイツや諸外国の公園を見て回った経験のある本多博士に一任したというわけです。本多博士も公園の専門家ではありませんでしたが、公園設計のために資料をかきあつめ、特にドイツの造園学校の教授であったマックス・ベルトラムの図を参考にしたようです。本多博士は門のな

壇などの西洋的要素を取り入れながら、日本的なツルをかたどった噴水や和風な池なども設置する和洋折衷の設計案を考案しました。そして明治36年、無事開園を迎えることとなりました。

日比谷公園には、本多博士にゆかりのある、「首かけイチヨウ」が立っています。このイチヨウは、日比谷公園近くの日比谷交差点にあり、道路拡張に伴い伐採されることになっていましたが、樹齢推定400年の立派なイチヨウを惜しんで、本多博士は伐採作業を中止させ、日比谷公園に移植させることを決意し、東京市に掛け合います。植木屋でもできない移植作業に、東京市議会の議長はなかなか首を縦に振りませんでした。が、「自分の首をかけてでも、移植を成功させます」と言った本多博士の意気込みに押され、承認しました。それから1か月弱におよぶ移植作業を見事成功させ、この逸話にちなんで、「首かけイチヨウ」と言われています。

ちなみに埼玉県さいたま市にある現大宮公園も本多博士が改良設計しています。大正10年、敷地を4倍に拡大して、大運動場、蓮池、花菖蒲池を設置することを提唱していました。後に野球場や陸上競技場が建設され、本多博士の設計案を基に、昭和初期から中期にかけて「スポーツの

殿堂」として公園拡充がなされていきます。本多博士は、「埼玉県氷川公園改良計画」のなかで、公園の役割について、以下のように語っています。

田園生活、天然生活の要望せらるるは当然の現象にして、匆忙繁雑(そうぼうはんざつ)を極むる都市市民が、いかに都市を脱れて平和の境に変化ある生活を渴望するかは、想像の及ばざるものあり。…(中略)…就中、東京市民がその市民生活における心身の過労、神経の興奮または衰弱を癒せんがため、好適地を近接の地に求めつつあること、郊外に杖を曳く近時頓(とみ)に激増せるに依りても、之を知る得べし。

本多博士は近代文明社会において、疲労した人間の心身を癒すという、公園の果たす役割に注目していたのです。

五つ目は蓄財と社会貢献です。本多博士は蓄財家としても有名ですが、助教時代から給料の4分の1天引き貯金という貯金法を実践し、貯金は森林事業の投資に充てて、60歳の頃には現代の金額に換算して数十億円(の貯金と山林一万haを所有するほどになります。本多博士はこうして蓄えた財をほぼすべて公共事業

に寄附しました。中でも大きなもの3千haを埼玉県に寄附しています。寄附する条件として、「学生のための奨学金制度を設け、山林から得られる収益金の一部をあてること」とし、昭和28年に埼玉県は「本多静六博士奨学金貸与条例」を制定し、翌年から貸与を開始しています。この奨学金は無利子の貸与で、現在までに2千人以上の学生が利用しています。

ちなみに本多博士と秩父との出会いですが、本多博士が東京大学の教授になった明治33年頃、まとまった貯金ができたため、秩父中津川の原始林4千haを、立木と一緒に平均1町歩4円で買い入れ、数年間でさらに8千haの山林を購入しました。その後、大正5年に所有する秩父の山林3千余町歩を東京大学に売却し、昭和5年には残りの全部を、秩父地域の振興と奨学金の創設を条件に埼玉県に寄附しました。

このように奥秩父と本多博士の関係は大変深く、大正14年の論説「森林公園と奥秩父（中津峡）の景勝」で奥秩父一帯を森林公園とする構想を描いています。論説の中では、「秩父中津峡は山溪の構造美と妙齡美を遺憾なく発揮し、かつその装飾をなす森林は殆ど自然のままに残され、全山種々の闊葉樹（広葉樹）や針葉樹の混成せる大喬林に覆われて、緑浅きあり深きあり、幽邃なる

自然の色彩美を發揮している」として、東京から日帰りで訪れることができる景勝地として賞賛しています。結果としてこの構想は成りませんでした。昭和11年には秩父公園（現在の羊山公園）の設計にも携わっており、秩父の自然・観光の誘致に協力しています。本多博士は昭和27年に亡くなりますが、その2年前の昭和25年には秩父一帯の視察旅行を行っており、自身で植えた樹木の姿に「涙を流した」という記録も残っています。

【渋沢栄一の生い立ちと功績】

次に、渋沢栄一の生い立ちと功績について簡単に触れてみます。

渋沢栄一は、皆さんもご存じの通り、日本の近代資本主義の父、日本の銀行の父などと言われ、明治から大正にかけて数百年の企業の創立・運営に携わっています。

渋沢栄一は天保11年武蔵国榛沢郡血洗島村の富農渋沢家に生まれ、栄一は幼くして商才を發揮して、13歳の頃から単身で藍の葉の買い付けの商いを行っていました。

当時、攘夷思想が興り、血洗島でも若者たちの間で倒幕計画の企てがあり、栄一もその若者衆の一人でした。結局、この計画は中止したのですが、栄一は謀反による捕縛を恐れ、従兄弟の喜作とともに京都へ逃

げのびます。その後、知己のあった一橋家臣の平岡平八郎のすすめで一橋家の家臣となりました。

慶喜が15代将軍となったあと、幕府は外国の視察や弟徳川昭武の留学、万国博覧会への参加などを理由に西欧へ視察団を送ることになり、栄一は慶喜の推薦で会計係として参加します。栄一は昭武が帰国するまでの1年半、ヨーロッパで過ごし、先進的な経済の仕組みや政治、教育、インフラ事情などを学びました。日本では幕臣たちにより彰義隊が組織され、栄一の従兄弟喜作は彰義隊の頭取となり、本多晋も幹部となります。その後、大政奉還が起こり、新政府が樹立されたのを受け、明治元年、栄一は昭武とともに帰国しました。もし、栄一が日本に残っていたら、彰義隊に入り彼らとともに戦争に加わっていたかもしれませんが。西欧で日本の未来を見ていた栄一と江戸の終焉を目の当たりにした喜作や晋という構図には、運命の皮肉が感じられます。

栄一は帰国後、慶喜が隠遁していた静岡に移りますが、明治政府から出仕の命を受けます。最初は出仕を固辞しますが、大蔵大臣の大隈重信から、「出仕を断れば、慶喜公は政府に非協力的で優秀な人材を出さないとして評判を落とすことになる」と脅され、出仕を受け入れます。大

蔵省に入り、租税正・改正掛を務め、租税制度や土地制度に関するもののほか、殖産興業政策や郵便制度の立案、鉄道敷設など多岐にわたる事業に関与します。

栄一は退官後、日本で最初の民間銀行、第一国立銀行を創設します。栄一は総監役として積極的に融資し、株式会社設立・運営に関わっていきます。栄一は、「合本主義」という考え方の基、利潤追求型の資本主義でなく、公益追求型の資本主義の事業促進に注力しました。栄一は数百年の企業設立に携わりますが、企業の指導者に立つというより、主に相談役として活躍しています。顔の広かった栄一は企業間の揉め事の仲裁役として職種を超えた人的ネットワークを活かし、人材の紹介や斡旋に励んだそうです。

【本多静六と渋沢栄一】

今までお話した中でも、鉄道防雪林の設置や明治神宮の創設で本多博士と渋沢栄一は関わりがありました。他にも栄一の幅広い人脈の中で、同じ埼玉県出身ということもあり、両者は深い関わりを持っています。

また、二人には次のような共通点があります。まず、1年以上にわたる西欧留学、そして自立した経済・経営を重視し、「私利」ではなく

「公益」を重視する活動を行っていることなどが挙げられます。

まず二人の大きな関わりとしては、埼玉学生誘掖会があります。明治35年に埼玉県出身の各界で活躍する人々で組織された民間団体です。目的は埼玉県出身学生のための寄宿舎設置や奨学金貸与などの学生支援事業のためです。本多博士は自らが苦学生として経験をしていたことから学生援助を目的とする誘掖会の前身である埼玉学友会に協力することになります。多くの資金と協賛者を集めるためには、栄一の助けが不可欠でしたが、当初、栄一は資金繰りが不透明である学友会への参画には消極的でした。そこで本多博士は栄一と関係が深かった諸井恒平に自分を紹介してもらい、直談判の約束をこぎつけました。そして明治33年の夜、本多博士は歩いて渋沢邸に赴きます。渋沢が帰ってくるまでの11時過ぎまで渋沢邸の玄関で粘り、本多博士はようやく栄一と面会しますが、栄一は本多博士に自前で資金を用意できない事業には協力しないと突き放します。しかし、本多博士は懐から自身の年収の3分の1にあたる300円を取りだし、学生育成のために自ら多額の出資をする所存であることを示し、その行動に心を動かされた栄一は、全面的に協力することになります。

栄一の協力もあり、誘掖会には埼玉県内で1,700人以上の会員が集まり、多くの資金も集まりました。明治37年には念願の寄宿舎が完成し、貸与型の奨学金や渋沢奨学金といった学生支援も始まります。栄一は寄宿舎に度々訪れ、スポーツ大会などイベントには殆ど出席し、本多博士も理事・副会頭を歴任しました。

昭和6年に渋沢栄一は亡くなりますが、その時本多博士は埼玉学生誘掖会の副理事長として弔辞を送っています。栄一の死後、本多博士が2代目会頭に就任しました。その後、昭和12年には寄宿舎の建て替えを行い、再出発しましたが、学生の減少と建物の老朽化に伴い、平成13年に閉舎となります。しかし、誘掖会は今でも存続しており、給付型の奨学金制度を続けています。

本多博士は栄一について、「最初のとっつきは非常に冷淡な感じを受けますが、一旦話が分かったとすると真心こめて尽くしてくださる人でした」と評しています。これは自身が若い頃に渋沢邸で門前払いをくらった経験や、埼玉学友会の交渉経験からきている言葉のように思われます。

その他にも、秩父セメント会社の創設に、渋沢栄一・本多静六・それから諸井恒平（深谷市出身）が深く

関わっています。明治40年、本多博士が海外視察から帰ったことを機に、渋沢は埼玉県出身の実業家を集めて晩餐会を開きますが、その席で本多博士は海外では基礎素材が煉瓦からセメントへと代わっていることを述べ、秩父の武甲山を資源としてセメント事業を興すことを提案します。それを受けて、当時煉瓦事業を展開していた諸井恒平がセメント事業を主導していくことになります。セメント事業なくして日本の発展はなかったと言えますし、本多博士は経済学の観点から、国の発展のため、山の鉱石資源の活用にも注目したのでしょう。

もう一つ、日光東照宮三百年祭事業に栄一と本多博士が関わっています。大正2年9月、渋沢は日光東照宮三百年祭奉斎会の会長に就任し、徳川家康没後三百年記念大祭のために建築の改修や防火設備の補修など、記念事業に取り組んでいます。そこで本多博士は、大正3年6月23日、日光東照宮社務所において、「日光一帯の山水風景利用策」として講話を行っています。風致整備だけでなく、中禅寺湖の周遊船会社の設置や絵葉書名産品の販売を薦めており、本多博士の経済的観点を組み込んだ興味深い講話です。本多博士はこの講話のほか、当時30円の寄付を養父本多晋の連名で行っており、

徳川に使えた元幕臣としての本多家と渋沢家との繋がりを感じさせます。

最後になりますが、本多静六と渋沢栄一の共通点として、二人とも番付表を作っています。本多博士は大正時代、全国の樹木調査を行い、樹木の保全意識向上に役立てるため、「大日本老樹番附」を作っています。栄一は幕末、地元の藍の品質向上のために、より良い藍玉を作らせるため、「武州自慢鑑藍玉力競」という番付表を作っています。つくられた時代は若干違いますが、新しい資本主義の時代が到来する日本で、二人の実業家がこうした番付表を作っていたという類似点は非常に興味深いです。

以上で終わります。ご清聴ありがとうございます。

（文責事務局）



会員便り

山と落語

会員 土屋 貞治

山が好きで落語を聞くことも好きです。山に因む噺といえはこんなのがあります。



『大山詣り』

これは相州大山、神奈川県の大山に行く噺で、ある長屋で大山詣りに行くことになった。

酒飲みの熊さんは先達の吉兵衛さんから毎度酒の上で喧嘩をし仲間迷惑をかけるので断られる。が今度ばかりは喧嘩したら頭を丸めてもいいと約束し行くことになる。

ところが下山後の宿で酒の上で大喧嘩をし寝てしまう。

これに怒った仲間たちは飲みすぎで寝坊している熊さんの頭をクリクリ坊主にして先に出発してしまう。

一方目覚めた熊さんは頭を坊主にされたのを恨み、あることを企てる。

自分だけ駕籠にのり先回りして長屋に帰り女房連中を集め、実は皆で帰りに金沢八景で船に乗ったところ嵐で船が転覆し自分だけが助かった。申し訳ないので供養のため自分は坊主になったと伝える。泣き出した長屋のかみさん連中も尼さんになって回向しようということになり皆髪を落としてしまう。

そこへ何も知らない一行が遅れて帰宅、かみさんたちの頭を見て驚く。

先達の吉兵衛さん曰く「お山は晴天、家へ帰ればお毛が（怪我）なくておめでたい。」



和名倉山ワークに参加 後列の右から2番目が土屋さん

『あたま山』

花見に出かけた吉兵衛（けちべえ）さん、拾ったサクランボ食ベ家で寝ていると、あくる日頭から桜の木の芽が出てやがて大きく育つ。春には立派な花が咲き、そこに花見の客が集まり飲めや歌えの大騒ぎとなる。

あまりに騒々しいので植木屋に頼み桜の木を抜いてしまうがその跡には大きな穴ができ、やがてこの穴に雨水がたまり魚がわく。おおぜいの釣り客、また屋形船まで出、喧嘩騒ぎも起きてしまう。

吉兵衛さんこんな苦勞に堪えかね自分の頭の池に身を投げてしまうという噺。

会員便り

私も山に登っているといろいろな落語のネタになりそうな話があります。

若いころ山仲間と4人で後立山の縦走を計画、私を含め3人は夜行列車で白馬駅から白馬大雪渓を登り白馬岳のテント場で一泊、1人は仕事の都合で一日遅れ二泊目の唐松岳のテント場で落ち合う計画でした。



白馬岳 遠景

ところが一泊目白馬岳のテント場に着き、さっそくテントの設営にかかったところ誰もテントのポールを持って来ていないことに気が付きました。忘れてきてしまったのです。あくる日に合流の仲間に連絡し持ってきてもらうことにしましたが、その日はどうしようということになりました。そこは皆若かったのです。

その晩は月が煌々と輝く夜で雨の心配がないため三人でテントの入り口から頭だけ出してテントを寝袋代わりにして休むことにしました。傍目には変な格好だったでしょう。テント場代集めのアルバイトのお兄さんも私たちの格好を見て同情し、金を取

らず雨になったら小屋に避難してもいいと言ってくれたのでした。幸いその夜は降雨もなく寝ることができました。

そして翌日の唐松岳のテント場には無事ポールも届き立派にテントの設営ができたのでした。

また学生時代には秋も終わりのころ安達太良山と磐梯山の登山に行きました。安達太良山に登り沼尻温泉付近にテント泊、翌日は国道をテクテク歩き裏磐梯から磐梯山に向かいスキー場の中腹でテントを張ることにしたのでした。

夕闇迫るころ、さて水場はと探すと近くに小川の流れるのを発見、暮れかけた中でカレーとご飯を作り早々と寝たのでした。ところが夜中になり腹の調子が悪く、とうとうテントから外に出てキジウチをする羽目になったのでした。

あくる日明るくなって見ると昨日の小川はただの水ではなく、どうも今日登る登山路のそばにある古い温泉宿の温泉の排水だったのです。

でも幸い私だけ当たったようで他のメンバーは何ともないようでした。

いずれにしても後になってからは笑える話です。いくら落語が好きといっても山では落ちないようにしたいものです。おあとがよろしいようで。

東日本大震災復興支援

福島県田村市の百年の森 視察(5回目)

副理事長 守谷 裕之

例年、7月に視察をしていたがコロナ禍、天候不順が重なり延期せざるを得なかった。それで年度が過ぎ新年度に入り4月7日に行く事になった。4月という時期は冬に広葉樹は葉を落とし新芽が出る頃だ。林道を境に山側斜面と谷川斜面にブナを270本植えた。山側は低木の木々が少なく直ぐに入る事が出来、林相も明るい。それに対して谷川斜面はうっそうとして入る事もなかなか出来ない。今回は自由にではないが曲がりくねりながらも植林したブナを粗全部確認出来た。



2014年4月16日に植えた17年もののブナ。
(谷川の斜面)



あれから8年が経ち5mは優に超えている。毎年高さを計っていたが正確に測定できなくなった。
(山側の斜面)
太さは25.5cm～27.7cm

放射線量

①田村森林組合の前に設置された常時放射線監視装置



2014年4月



2022年4月

東日本大震災復興支援

ブナ17年もの以外の小さな苗（1070本）の状況



ポット苗ですから高さ30cmぐらいのものが多かった気がします。それが粗全てが育ち密生状態です。



2022年度 長瀬宝登山下刈り活動報告

4月17日(日) 曇り メンバー 7名参加

コロナの感染防止に努めつつ、当日はコロナの関係で3年間下草刈りをしていなかった最上部のサクラ類の植樹地域の下草刈りを実施しました。サクラ類は大きく育っており、ちらほら咲いていました。

5月8日(日) 曇り メンバー 9名参加

コロナの関係で参加を見合わせていた方も今回から復活して参加いただき、多くの方に作業をしていただきました。

今回は東側急斜面の広葉樹林帯を中心に下草刈りを実施しました。また、密になった木々の択伐やツル伐りも実施しました。



6月19日(日) 晴れ メンバー 10名参加

今回はツツジ類を植栽した箇所を中心に下草刈りを実施しました。

当初植えたツツジ類は比較的大きくなっています。また、補植したツツジ類も順調に育っており、10年後が楽しみです。



7月24日(日) 晴れ メンバー 7名参加

今年は梅雨明けが早く、今日は暑い中での作業となりました。雑草の生え方が違います。5月に下草刈りを実施した東側急斜面の広葉樹林帯のまだ手が入っていない箇所の作業を行いました。蒸し暑く水分補強をしつつ、2時間作業を行いました。皆さん汗だくになっていました。おかげさまで広葉樹林帯の整備が大分進みました。

8月21日(日) 晴れ メンバー 11名参加

8月の下草刈りには、いつも三井住友海上火災の方々ボランティアで参加下さっていましたが、コロナの影響で3年見合わせております。そんな中ですが、初代会長の内藤保険サービス(株)から4名の方が参加くださいました。猛暑の中、東側急斜面の最下部地域の下草刈りを行いました。

おかげさまで今年度は延べ44名の方に参加いただき植樹したサクラ類、ツツジ類、クリなどの広葉樹林が順調に育っています。

令和4年度 第15回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の令和4年度第15回通常総会が、新型コロナウイルスの感染防止に努めつつ、6月5日(日)埼玉会館において開催されました。

当日は、令和3年度事業報告・収支決算案、令和4年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

また、総会終了後、「本多静六と渋沢栄一」と題して、久喜市立郷土資料館主事兼学芸員星野諒氏による記念講演会を開催しました。同じ埼玉の出身である本多静六博士と渋沢栄一翁の関わりについて理解を深めることができ、成功裡のうちに終了することができました。(講演録は別途掲載)



和名倉山仁田小屋尾根の縁結びの木

和名倉百年の森 第44号 2022年10月1日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会 小林公彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1 コムナーレ9階

さいたま市市民活動サポートセンター内 メールボックスA-71

TEL/FAX：0480-22-3131

<http://www.100nen-forest.org> e-mail：info@100nen-forest.org